

# AXIS

Concepts on the horizon

August  
2015  
vol.176

Interview

日根 剛

Yoshi Tane [DGT.]

Feature

デザインスタートアップの未来冒険

The Future Adventures of Design Startups



Cover interview

# 田根 剛

Tsuyoshi Tane [DGT.]

建築家 Architect

2006年、エストニア国立博物館のコンペに優勝し、12年に新国立競技場のファイナリストに名を連ねたレル・ゴットメ・田根／アーキテツ(DGT.)の田根 剛。パリ・グランパレでの北斎展やシチズンのインスタレーションをはじめ、さまざまな展覧会の会場構成など活動範囲は広く、欧州、米国、日本とプロジェクトの数はますます増えている。

パリを拠点におよそ月一度の割合でエストニアや日本を往復する田根に、東京で話を聞いた。

Tsuyoshi Tane is a partner at DGT. (DORELL.GHOTMEH.TANE / ARCHITECTS) that won the grand prize in a competition held at the Estonian National Museum in 2006 and was selected as one of the finalists for the proposal of the New National Stadium in Japan in 2012. DGT. conducts a broad range of activity including various exhibition space designs such as for the Kusai exhibition at Grand Palais and an installation for Citizen; the number of projects it handles seems ever increasing in Europe, the U.S., and Japan. In Tokyo, we talked with Tane who is based in Paris and travels back and forth to such countries as Estonia and Japan at a pace of once a month.

## の強さ、夢が形になったとき、建築の力が発揮されるのだと思います

ドレルさん、リナ・ゴットメさんとともに、事務所に上げた経緯について教えてください。

5年当時、自分はロンドンのデイヴィッド・イ・アソシエイツで働き、ダンとリナは、ヌーヴェルのロンドン事務所にいました。すると仲良くなり、一緒に何かやってみようかというときに、ヨーロッパでいちばん大きなコンペがエストニア国立博物館のコンペです。面白そうだと飛びつき、夜中にパリではプランを練りました。そしてある日突如、いきなり国際コンペに勝った。ヨーロッパのコンペは3分の2以上が途中でなくなるけれど、エストニア側からすぐに動き出すという連絡が来て、慌てて事務所を設立しました。

パリを拠点にすることに当初は反対だったそうで

とリナはすでにパリに戻っていたので自分もフランス語がわからないので無理だと思って2対1で負けてしまった(笑)。まず3カ月ほどパリで暮らしてみようかという話でパリへ移りました。けれど、パリのまちなみや空気が好きで、新天地でやってみようかとコロリと気が変わりました。日本を出た後、スウェーデン、デンマーク、英国で暮らしてきましたが、どの土地も好きではありません。その土地で生きていくのが決めたら、あとはやるだけだと思えました。事務所では、エストニア国立博物館や12年続中のルノーのモーターショーのような

大きなプロジェクトは3人で手がけますが、それ以外は個々が主導するなかで協力し合ったり、スタッフの組み方もフレキシブル。現在、インターンを含めて約15人の多国籍のスタッフがいて、18のプロジェクトが同時進行しています。

—— 知られることとなったエストニア国立博物館について改めて教えてください。今はどのような状況にありますか。

建物は年内から2016年初頭に完成予定です。公式のオープニングは16年秋。コンペからすでに10年が経過していますが、人生をかけたプロジェクトの完成は今からとても楽しみです。

建築プランは、敷地の傍らを全長1.2kmのコンクリートの塊が森を切り裂くようにして分断していたのを航空写真で見つけたことが発端です。それは、ソ連占領時代につくられ、放置されたままの空軍基地の滑走路。その占領時代の負の遺産の延長上に、新たなエストニアのアイデンティティであるナショナルミュージアムをつくらうと考えました。プロジェクト名は「メモリー・フィールド(場所の記憶)」です。

事務所を立ち上げてから最初の4年間はこのプロジェクトに専念しましたが、建設を始めるための入札直前にリーマンショックが起こり、EUの経済危機もあって中断。そうしたなかで国が国債を組んで建設に踏み切った。突然入札が行われ、3カ月後の13年3月には建設が始まりました。

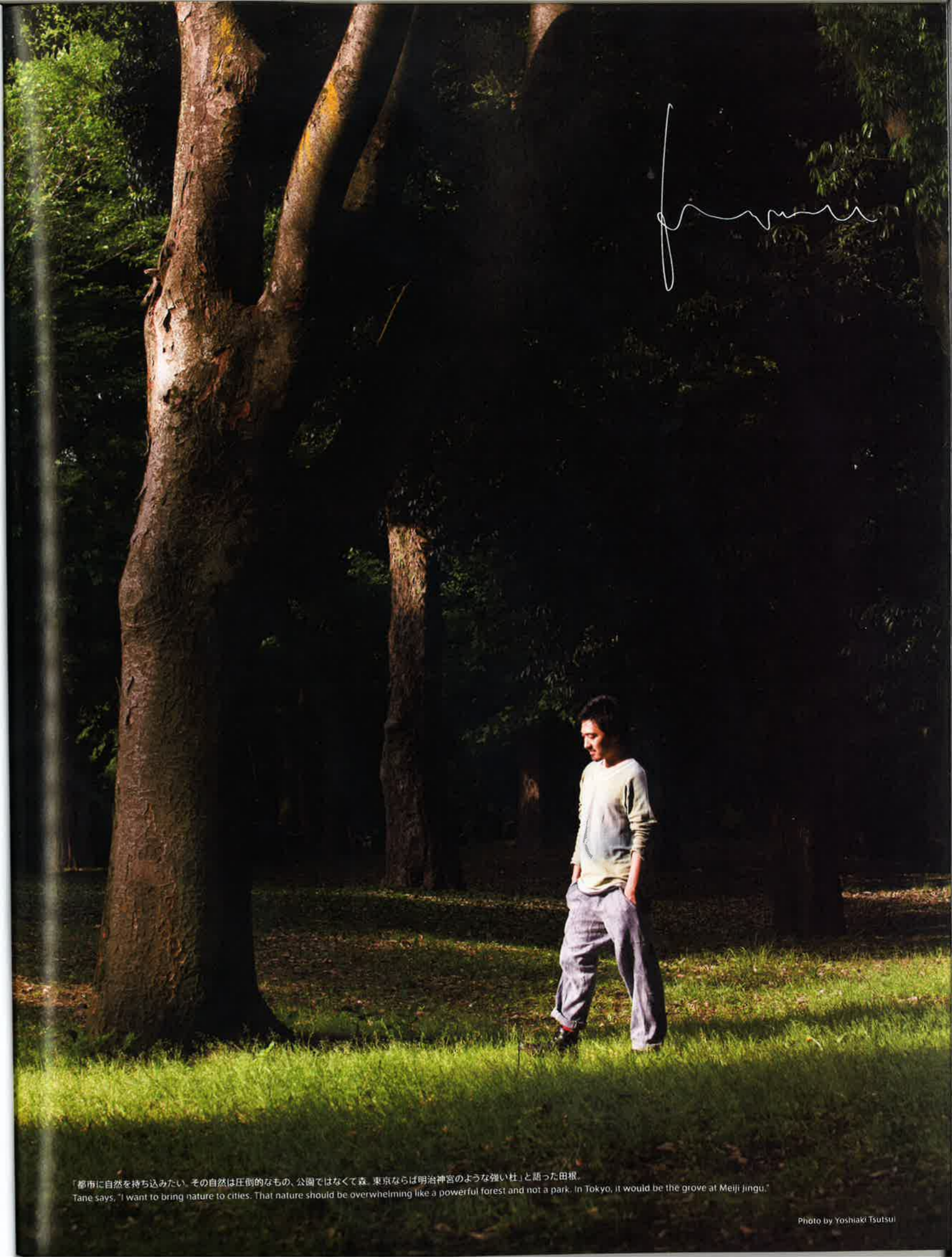
実際に建物が建ち上がる姿を見て、「建築は凄い!」と感激しています。今も1カ月に一度の頻度で訪れますが、毎回言葉にならないくらい大きな建築の力を思い知らされます。荒野のような広大な大地に延床面積34,000m<sup>2</sup>という巨大な建造物がどんどん立ち上がっていく。何もないところから人類が何かをつくり出そうとするエネルギー、国家のアイデンティティやイデオロギーを含めて、前に突き進んでいこうとするときの力や勢いに圧倒されます。

まだ、幅70m、長さ350mというボリュームを100人以上の職人たちが3段階に分けて36カ月で作り上げていく、建築が生まれてくる瞬間の壮絶さを感じます。現場では図面通りにいかないことがあり、雑な人の手の荒々しい痕跡もある。しかし、何かを生み出そうと信じる力であったり、それを必要とする人の想いのほうが、洗練されたものや技術の高さより、はるかに人の心を動かします。

ミュージアムができることでエストニアの未来が変わる。そのような人の想いの強さを形にすることが建築には可能です。想いの強さ、夢が形になったとき、建築の力が発揮されるのだと思います。

—— 想いの強さに対して建築家ができることは?

建築家の想いだけで建築はつくれません。古い神殿や寺院、家といった人の想いと場所が凝縮した建築は強い。またかつての東京オリ



「都市に自然を持ち込みたい。その自然は圧倒的なもので、公園ではなくて森。東京ならば明治神宮のような強い杜」と語った田根。Tane says, "I want to bring nature to cities. That nature should be overwhelming like a powerful forest and not a park. In Tokyo, it would be the grove at Meiji Jingu."

## のごとの意味を掘り下げ、「場所の記憶」から建築を考え続けていきたい

の建築は、最高の建築をつくらうと社会の期待を背負い、プレッシャーと闘いながら形にできた建築家の仕事です。だからこそ、人の心に響く。建築が後世に語り継がれる力は、つくった当時の人々の想いだけです。実際、建築の仕事の9割は忍耐。残りの1割を見出せるかどうか。生み出す、つくり出すという個人の作家性よりも、1つのことを信じ、捧げたり、祈ったりする力、そのほうが強だから「場所の記憶」は強いんです。

「場所の記憶」について解説していただけますか。

場所の記憶は、「場所」と「空間」、「時間」と「真実」の関わりの中にあります。これらは誰も持っている概念ではあるけれど、いつから場空間に変わるのか、時間のどこから記憶されるのかはわかりません。場所はたった1つではなく、動かすことができない。空間は無分割して細分化でき、この部屋の上にも異なる階があり、屋根の上には空があり、上には宇宙があるという具合に、無限に広がることができます。

時間とは連続で、一秒と一秒の間も途

切れることなく継続しています。その時間を断絶して漂白したのが近代的な考え方です。そして、記憶とは、意味。意味は記憶として存在し、物質が失われたとしても最後に残る。人間にとって最後に信じられるのは、記憶なのです。

その4つの概念を示した座標軸の真ん中に建築はあるのではないかと考えています。場所があり、無限に広がる空間があり、続いていく時間が流れ、記憶としての場所の意味が生まれていく。さまざまなプロジェクトを手がけていますが、毎回必ずこれらが自分の中のテーマになる。一生考え続けていい大きなテーマだと思っ取り組んでいます。

「場所の記憶」がないモーターショーや展覧会の会場構成では、どのように考えていくのですか。

ものには必ず記憶があるという点からスタートします。ものごとには意味があるので、その意味を掘り下げていく。展覧会や舞台美術は、空間と時間、ものの意味に強く触れることで、体験を記憶へとつなごうとしていきます。

シチズンのインсталレーションでは、時間について膨大なリサーチをしました。時間という

概念が存在しなかった古代の人々がどのように時を認識しはじめたのか、今も過去や未来という言葉を持たない民族がいるなど。歴史的、民族的、物理的、科学的に調べて、たどり着いたコンセプトが「光は時間であり、時間は光である」という「LIGHT is TIME」。光と時間の記憶というもののごとの意味を掘り下げたのです。

4月末に竣工した「大磯のための家」について教えてください。

プロジェクトの規模や用途に関係なく、まず膨大なリサーチをするのが僕らの取り組み方で、ここでは大磯の土地の歴史を時系列で探っていきました。1つは、施主から「100年後も残るような家にしてほしい」という大きな課題を与えられたので、逆に100年前はどのような土地だったのかを見返しました。すると、江戸時代は東海道が脇を通る宿町であり、さらに遡ると約5000年前の縄文時代からずっと人が暮らしていた痕跡が残っているとわかった。

また、日ごろから世界の民俗文化についても研究しています。アジア、ヨーロッパ、中東、アフリカといったそれぞれの環境の中で装置として

の家のあり方を伝統的な民家から調べていました。そこで、「家とは何か」という根源的な問いかけを行った。たどり着いたのは、家とは最終的に眠りに帰る場所、家族を守る場であるということ。眠る場所が根源的な家なのだと思います。大磯のための家では、1階が「居間」で、2階が「寝間」になっています。

具体的には、敷地の土を掘り起こして、土壁、土床に用いるといった伝統的な工法を採用しました。土地にあるものを使うことと、住宅の性能を上げるためです。日本の家は、冬は寒く、夏は暑い。伝統的に土や木が用いられたのは湿気を吸収する素材だからです。コンクリートやガラスでつくられた近代建築では呼吸ができません。大磯では、地面を少し掘り下げ、陽の当たらない地面によって夏の室温を下げ、冬は輻射熱の電熱パネルを敷くことでほんのり暖かくでき、1階はエアコンなしで暮らせるように考えています。

民族や文化の研究とは、学生時代から個人的に取り組んでいるものですか。

事務所を立ち上げ、これからの建築を考えていこうとパートナーたちと話して始めました。スター建築家たちの時代があったけれど、世界中どこでも自らのスタイルを貫くやり方には違和感を覚えていたからです。自分たちは場所の記憶を掘り起こして、そこから斬新な建築を考える。その際、目の前に見える景色や環境ではなく、もっともっと深いところを掘り起こしたときに、それがより現代にとって強い意味を持つことがある。それを形にして建築のメッセージにできないかという考え方です。

アーキテクチャーと同時に、アーキオロジーという考古学や発掘作業に近い考え方を並行させている感じでしょうか。アーキテクチャーとアーキオロジーは場所を共通点として、未来へ向けてつくり上げていく建築と過去を掘り下げていく考古学では方向性は逆だけれど、やっている作業は近い。発掘するいろいろな時代の断片的な痕跡を集めて、そのなかでいちばん意味のあるものを問ひかけ、それをどのように形に転換できるかというのが僕らのやり方です。

振り返ると、サイトウ・キネン・オーケストラで小澤征爾さんのオペラの舞台装置を手がけたときに、音楽家たちが舞台裏で楽曲を練習しているのを見て、本当に美しく感激したことにとり組むけれど、日々鍛錬を積む作業は行っ



新国立競技場設計競技のための「古墳スタジアム」。2012年、11作品のファイナリストに名を連ねた。DGTのプランは、世界最大の祭典であるオリンピックと、古代日本最大の建造物である古墳を1つの建築にするというもの。KOFUN STADIUM for the New National Stadium in Japan design competition was one of the 11 finalists in 2012. DGT's plan was to combine the Olympics (the world's largest festive event) with kofun (ancient burial mound that is Japan's largest ancient structure) into a single building.

ていないのではないかと。自分たちは考えることが仕事であり、考える力を鍛えるためにアーキオロジーとしてのリサーチを日々の基礎トレーニングとして始めた。知っていると思っていることも、全く知らなかったことのように掘り下げていくと、新しい発見やまだ見たことのない何かに出会えるかもしれない。それで初めてスタート地点に立てる。リサーチは自分たちの思考の基礎や地力を鍛えるためのトレーニングと言えます。

自らをリサーチャーと呼ぶデザイナーもいますが、クリエイティブワークの最初にリサーチがあるという点では共通項があるのかもしれない。

これだけ膨大な情報がある時代に、情報をどのようにして自分たちの発想に変えられるかというのはあるのかもしれない。情報の現代性に関して言えば、フランク・ゲーリーのグッゲンハイムミュージアムは、1つの建物によってこれまで都市開発でも文化政策でもなし得なかった文化と経済の融合という点で大成功を収めました。ユネスコの世界遺産も同様で、その情報が加わっただけで文化、観光、経済が密接になって都市を変えていく。建築は情報をどのように捉えるかが、これからの大きなテーマになっていくと思います。

これから手がけたいプロジェクトがあれば教えてください。

いつかやってみたいのは音の空間でしょうか。建築が楽器になる、音と光で満たされるという

のは空間の原型といえます。建物は壁や天井などものとしてつくられているけれど、つくり出した1つの空間は結果的に、音と光で満たされて、それらで空間の心地は決まる。その究極である音のための空間を手がけたいと思いますね。

もう1つは場所の記憶について考え続けているので、長い時間を持った古い建物をいかに現代の形に変えられるかを追求していきたい。よく土地を更地にして新しい建物をつくることがありますが、すると「この建築の前には何があったのか？」と更地になった瞬間に人間の記憶から失われてしまう。つまり過去がゼロになる。建築は記憶を後世へと伝える装置でもあるので、どのようにして過去のもを現代につなげていくか。建築の寿命がどんどん短くなっていくなかで、ものごとの意味を掘り下げ、場所の記憶から建築を考え続けていきたいです。(インタビュー・文/編集者・谷口真佐子)

田根 剛 / 1979年東京生まれ。北海道東海大学芸術工学部建築学科卒、デンマーク王立芸術アカデミー客員研究員。デンマークのヘニング・ラーセン・アーキテクトとロンドンのデイヴィッド・アジャイ・アソシエイツを経て、2006年エストニア国立博物館の国際コンペ受賞をきっかけに独立。ダン・ドレル、リナ・ゴットメとともにパリにDGT、(ドレル・ゴットメ・田根/アーキテクト)を設立。代表作に、エストニア国立博物館(16年完成予定)、新国立競技場設計競技最終選考案「古墳スタジアム」(12年)、「A HOUSE for OISO」(15年)、「とらやバリ店」(15年)など。フランス文化庁新進建築家賞(08年)、ミラノ建築家協会賞(08年)受賞。今秋開催される21\_21 DESIGN SIGHT「建築家 フランク・ゲーリー展」ではディレクターを務める。主な共著書に『海外で建築を仕事にする』(学芸出版社)、『やわらかい建築の発想』(フィルムアート社)。コロンビア大学GSAPP、スイスESVMD大学院講師。<http://www.dgtarchitects.com>

Photo by Takuji Shimmura



建設の進む「エストニア国立博物館」。ソ連占領時代の名残である軍用滑走路と屋根がつながるかたちでつくられている(2014年7月撮影)。写真左(15年5月撮影)は、キャンティレバー構造の、庇の下でイベントができるような広々としたエントランス。間口を絞り込んだ入り口を通り抜けると、再び開放的なホワイエ空間が広がる。Construction in progress of the Estonian National Museum. Constructed so the roof appears to be an extension of the military airstrip from the Soviet era of occupation (photo taken in July, 2014). At left is the spacious entrance where events can be held under the eaves of the cantilever structure (photo taken in May, 2015). Going through the narrow opening of the entrance reveals an open foyer space.

Photo by DGT.



2015年4月竣工の「大磯のための家」はDGTにとって初の住宅建築。「日本の家」をテーマに、家が土地に建つのではなく、土地のために家を建てることを考えたという。敷地の土を壁や床に用いるなど、その土地で呼吸する素材を用いている。1階が土の居間、2階が木の寝室。

A HOUSE for OISO completed in April 2015 is the first residential building for DGT. Based on the theme "Japanese house," they thought of constructing a house for the land rather than on the land. Materials that "breathe" with the land, including soil from the site, were used for the walls and floor. The 1st floor is an earthen living room and 2nd floor is a wooden bedroom.



のインスタレーション「LIGHT is TIME」の時計の基礎装置である地板を約80,000枚のLEDライトで構成し、動く光と音による幻想的な空間を演出した。2013年のパーゼルワールドでも展示。ミラノデザインアワード受賞、米国ワンクラブ主催のショー2015「デザイン部門」で金賞など多数。

The installation LIGHT is TIME is a fantastical space of moving lights and sound. It consists of approximately 80,000 main plates and 80,000 LEDs. It was first exhibited in Basel in 2013 and then traveled to Milan and New York. Received numerous awards including the Milano Design Award in two categories (2014) and the Gold Pencil Award in the Design category at the 2015 Design Awards in the U.S.

Photo by Takuji Shimmura

Could you tell us how you came to start the office with Dan Dorell and Lina Ghotmeh?

At that time in 2005, I was working at David Adjaye Associates in London and Dan and Lina were at Jean Nouvel's London office. When we were talking about doing something together, the largest competition in Europe was organized by the Estonian National Museum. It seemed interesting and we immediately decided to go for it, so we used to get together at night to work on our proposal. We surprisingly won an international competition in our first attempt. More than two-thirds of European competitions disappear midway through, but the Estonian side told us they wanted to get moving right away, so we hurriedly established our office.

At the time, Dan and Lina had already returned to Paris, but I didn't speak French, so I told them it was impossible to base it in Paris. But I lost two to one (laughs). I changed my mind when I saw the scenery in Paris. At the office, all three of us work on large projects like the Estonian National Museum and the Renault motor show in which we've been involved continuously since 2012. For other projects we form teams flexibly, such as one of us taking the helm and the others helping out. At present we have about 15 staff members working on 18 projects simultaneously.

Could you tell us about the Estonian National Museum a bit more in detail? How is it progressing?

The building is scheduled to be completed within this year or at the beginning of 2016. The official opening will be in fall 2016. It's already been 10 years since the competition, and we're really looking forward to completing this project that we've bet so much of our careers on.

The building plan was inspired by an aerial photo we found of a 1.2 km long concrete lump extending along one side of a site as if splitting the forest in two. It was a runway for an old Soviet airbase. We decided to build the national museum that will be Estonia's new identity that will play on the negative heritage from the Soviet occupation. The project name is "Memory Field."

Watching the building being erected, I'm really moved as to how amazing architecture is! A colossal building with a total floor area of 34,000 m<sup>2</sup> is being constructed on an expansive piece of deserted land. I'm awed by the power and momentum of humankind to drive forward, including the energy to make something from nothing as well as a nation's identity and ideology. There are many things that don't go exactly as laid out in the design, and there are rough traces of handwork, but the power to believe in making something and the desire of people who need it moves people far more than the advancement of sophisticated technology.

The completion of the museum will change the future of Estonia. Architecture is capable of giving form to the strength of people's wishes. When the wishes and dreams are given form, the building is instilled with power of architecture.

What can architects do for the strength of people's wishes?

Architects can't build that. The facilities built for the Tokyo Olympics long ago are the work and

ability of the architects who bore the hopes of society and the people and gave it form while battling various pressures. In fact, 90% of an architect's work is perseverance. The remaining 10% is whether she can find joy in it. The power to believe in one thing, or the power to devote oneself to it and pray for it is stronger than the artistic nature of an individual to create something. That's why "a memory of a place" is so strong.

Could you explain "a memory of a place?"

A memory of a place can be described in coordinates with the horizontal axis representing place and space, and the vertical axis representing time and memory. This is a concept we all know, but we don't know from when a place changes to a space and from what point in time a memory is generated. A place is a singularity and can't be moved. A space is infinity and can be divided and segmented, and expands infinitely. Moreover, time is a continuity that continues without a gap even between individual seconds. Memory is meaning. A meaning exists as a memory, so even if all the various pieces of information are lost, memory is the last thing that remains and the thing people can believe the most.

I think architecture sits at the center of the coordinates expressing those four concepts. I've been involved in various projects, and these concepts become the theme within myself each time without fail.

How do you think about space composition for an exhibition that does not have "a memory of a place?"

I start from a point that a thing always has a memory. A thing or event has a meaning, so I dig into that meaning. I can say that the relationship between space and time is closer in an exhibition or stage art. For the installation for Citizen, for example, I did extensive research on time, such as how people in ancient times when there was no concept of time started to become aware of time, or the fact there are still tribes that don't have a word for past and future today. The concept I arrived at after researching historically, ethnically, physically, and scientifically, is that light is time and time is light, which is expressed in the work LIGHT is TIME.

Tell us about A HOUSE for OISO completed this April.

As our approach is to do extensive research regardless of the project's scale or purpose, here we explored the history of the site in Oiso chronologically. As one of the things the client requested was to build a house that will remain even 100 years from now, we reviewed what kind of site it was 100 years ago. When we went further back in time there were traces of people living there from about 5,000 years ago in the Jomon Period.

We also do research into traditional folk houses throughout the world on a daily basis to explore the ideal house as a device. Another thing we delved into was the fundamental question, "What is a house?" The conclusion we arrived at was that "a place to sleep is the fundamental function of a house."

More specifically, we adopted a traditional construction method of digging out the soil of the site and using it for the earthen walls and

floors. By lowering the ground so the 1st floor is shaded from the sun, the indoor temperature is lowered by the ground in the summer, and by laying out heat-radiating electric panels, the house is kept warm in winter.

Are you doing research into ethnography and culture on your own?

No, we started discussing it together when we launched the office and started thinking about the future in different cultures. While we think about architecture, we adopt a thinking approach that parallels archeology or excavation work. Our way is to collect fragmented traces from the various eras we excavate, explore the most meaningful ones, and then think about what forms we can convey them into.

In reflection, it all goes back to the time I did a stage setting for Seiji Ozawa's opera with Saito Kinen Orchestra and being moved while watching the musicians practicing the music backstage. It made me think what architects are practicing diligently on a daily basis. Our job is to think, and we started research as archeology to improve our ability to think as our basic training. When you explore things you already know as if you knew nothing about them, you might just encounter new discoveries.

Are there any projects you want to do?

Some day, I'd like to do a space for sound. A building becoming an instrument and filled with sound and light would be the archetype of space. That's because walls and ceilings are made as objects, but a space as a result will be filled with sound and light, and those are the elements that define the comfort level of a space.

Another desire of mine is to pursue how a building with a long history can be transformed into a contemporary form, as I'm always thinking about the memory of a place. The moment it becomes new land, anything there that existed previously is erased from human memory. In other words, the past becomes zero. As architecture is also a device to hand down memory to future generations, we have to think of ways to link the past to the present. I'd like to dig into the meanings of things, and keep thinking about architecture from the memory of places. (Interview and text by Masako Taniguchi, editorial staff)

Tsuyoshi Tane was born in Tokyo in 1979. Graduated from Hokkaido Tokai University, Art and Engineering Department, Architecture Course and then became a visiting researcher at the Royal Danish Academy of Fine Arts. After having worked for Henning Larsen Architects and David Adjaye Associates, Tane established DGT with Dan Dorell and Lina Ghotmeh in Paris in 2006. Representative works include the Estonian National Museum (scheduled for completion in 2016); A HOUSE for OISO (2015); and TORAYA Paris (2015). Won the young architects prize granted by the French Ministry of Culture (2008) and the Architects Association of Milan Award (2008). Serving as director of the Architect Frank Gehry Exhibition to be held at 21\_21 DESIGN SIGHT this fall. He is teaching at Columbia University GSAPP and ESVM in Switzerland. <http://www.dgtarchitects.com>

Cover interview

Tsuyoshi Tane